山岳

昭和二十二年二月二日 校中学部 新田岳山 発行
兼任顧問 林 正一
責任者 第一号

発刊の辭

山岳部班長 島井 宏

(四、四学生諸君の切望によって山岳部の機関紙が発行されることになったのは最も欣快の念に堪へぬ次第である。

吾々五年生も発刊を企図したことはあったのであるが諸々の事情に妨げられて遂に成し得なかった。吾々皆数の不足をおぎなうと共に四年生諸君の努力に深く感謝の意を表する。

昭和二十年一月、山々には粉雪深く積って元の静かな山の姿はそろそろその威力を現わす。吾々五年生も間もなく卒業が迫って来た。

今年の冬は大いにスキーに出かけるつもりである。(最も学生諸君に計画を一任する。)

この機会に私達は新設部員に対して、なるべくこの機関誌に寄稿し、部員諸君の親切の機関となり得るやう、部員諸君の御支援を期待し、本誌の発展を祈って、簡単ながら発刊の辭に代へる。

山を讃へる歌

五年 田中 和市

一、げに巨いなる天地の大自然 刻々と資を立つ
限りなき山、偉容を 祝福してつどふ我等かな

二、遠花の妙の美、ただ自然の園の香に酔ひて
山ふところにわけ入れば 松籟既に我を呼ぶ

三、親をめぐるせらぎに、花さきぶはうるほひぬ
谷間にひびくうぐひすに 昔さながらこだまするぬ

四、紅葉飾る秋の山、雄雲おほふ冬の嶺
かれに我しき風情あり これに親しきけしきあり

五、時候の山に美を眺め動ける山に偉を増り
語らぬ山に成を聞き 静かなる山に霊気を知る

六、あゝ山反る山を訪ひ、精人間みういや岳に
月に誘りてうそぶいん 星にうたひて叫ばなん

十月三十七日 深夜

遠足会の報告

班長

本年度十月二十一日の遠足会は、前後数日の悪天候に比し、甚だ恵まれた天候であった。

これと共ふる芝中生諸君の日頃の心掛けのよいためか？ハハ……

さてさて、此の日の各部対抗リレーに吾が山岳部が一等の栄冠をかちえたことを報告し、関係部員の援助を感謝する。

来年も亦この栄冠を頂かんことを希ひ、田島先生はじめ遠足諸君に厚く感謝の意を表するものである。

山よ永遠に幸あれ

五年 林 正康

人未だ居住せざる浦東平野に建設の槌が打たれ、こうして今から芝々春秋既に幾百年。

雨素敵島の市民と祖先を育て来し郷土の山々は今も懐しい聖潮のつながりである。おゝ眺めたる越遠峯の山々よ、紅葉はその生命の力と美を讃えん。

吾は移り人は移り、もとこしに物憂げな人の心を、いつも慰撫する山々は厳かに絶りゆくその運命を眺め、吾等の郷土を見守るのみ。

相対してはれば眺ぬ草然とし、れ静かさが、こうに秘められた山霊の雄叫を聴け。

おゝ親愛なる郷土の五月男女よ、その眞髄に接して我らの吾界恒久の平和に處する眞の自由精神を究めよう。今日本は歴史に前例なき非武装の平和宣言の制定に一歩を印したのだ。

吾等の郷土の風物の中より日々研究を積重ねひたむきな精進努力は誰がするのか。

文化とは人類の生活をより豊かに、より善く、より美しくすることに他ならない。

公義、勤勉、研究、互尊、宇宙神律の純性の尚さを慎じ、真底より社会精神の改革を祈りし心を込めて文化の道路を吾等に導かう。

ひとつ懐しい時は山に向って叫び、悲しい時は更に山に向って訴へよう。

故郷の山は必ずや吾等の心をあたゝ励まし、希望と大歌声を與へてくれるに違ひない。

——一九四七、十、二十八——

昭和二十二年十二月頃の日付
旧新中学 中から三年生